

## 「いま宮沢芳重」記念出版の分担執筆の紹介

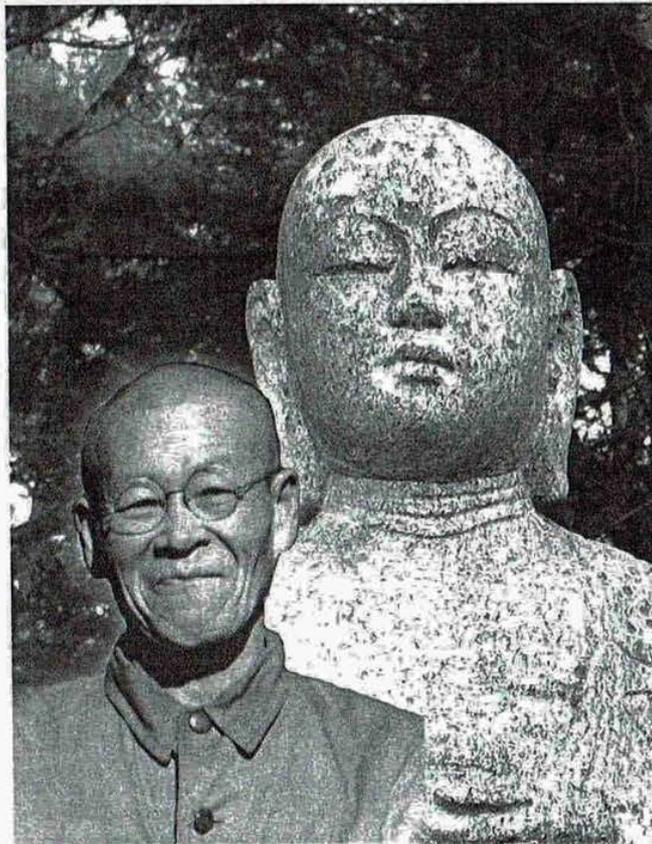
郷土が生んだ異色の偉人宮沢芳重氏が亡くなられた際、多くの方々の寄付により芳重地蔵が作られNHKで放送された。このDVDが幸運にも入手されその上映会と共にシンポジウムが2014(平成26)年4月29日出身地の松川町で、翌30日に飯田市で開催された。

同氏は、教育の機会に恵まれなかったが、決心して上京し天文・物理学の他種々の分野の勉強を一生続けた。

清貧の生活に堪え、飯田に郷立大学を作る夢を描き続け、飯田高校に天文台を作ろうと寄付をし、これが切掛けとなり天文台が実現し、大学の基本図書として飯田図書館に1200冊余の図書を送った。

同氏と交流が深かった叔父小塩完次の甥である私は、この行事に参加の機会を得た。このほど記念誌「いま宮沢芳重」発行に際し大変多くの頁を分担執筆させて頂いた。以下その頁を転載します。 2016.02.14 小塩立吉

# いま みやざわ よしじゅう 宮澤芳重



「地蔵になった男」宮澤芳重に学ぶ

# 清貧に堪え大学創設を 夢見た宮沢芳重さん

— 小塩完次との交流を通して —

パネリスト 小塩 立吉

(芳重氏と交流した小塩完次氏の甥)



## 第1章 宮沢芳重と伊那飯田出身の苦学偉人

宮沢芳重さんについては、叔父や父から聞いてはいたがごく浅いものであった。2012年早春のこと、大学夏期セミナー「スタディー・ジャパン(SJ)研修」を主催しておられる法政大学国際文化部の高柳俊男教授からお電話で、飯田を調べていると小塩禄郎、完次の名前が良く出てくる。一度お会いしたい旨の電話を頂いた。私が現在東京武蔵野市の日本禁酒同盟の事務局長をしており事務所兼小塩完次資料館にお訪ね頂いた。事細かに飯田下伊那のことをご存じなので、てっきり飯田の方かと思いましたが栃木県の方と聞いて二度びっくりした。

話が反俗の人飯田に大学をと理想を描き続けた宮沢芳重に及び、「叔父は生前宮沢さんと親交があり袋一杯資料がありますよ。」と申し上げたところ大変な興味を示された。

ご承知のように宮沢芳重に関しては、叔父も資料を提供し、既に松川町教育委員会を中心に幾多の書籍文献が刊行されている。<sup>註1</sup>

身内のことで大変恐縮ですが、宮沢芳重と同世代の完次叔父は病弱で飯田中学を中退し卒業が叶わず、苦学の末検定で早稲田大学に

進み卒業後は、定職に就かずおよそ人が遣らない、禁酒運動に一生身を投じ、極質素な食生活に甘んじ、講演や執筆で頂く僅かな謝礼などで生活していた。戦後は、これまた人類究極の政治形態世界連邦運動を加え取り憑かれたように邁進していた。

宮沢芳重と小塩完次は、同郷の誼と苦学歴と理想を追い求める者同士共感したようで恒例のように正月に完次宅を訪れ大学構想の討議を重ねていたこと、遺言を聞き取ったことも判明した。

私は、日本禁酒同盟の歴史を残そうと前任の小塩政子<sup>註2</sup>とともに小塩完次の伝記本<sup>註3</sup>を残したが、編集の過程で諸資料を読み進む間に幕末に生まれ飯田藩の重臣潮田家に嫁ぎ、若くして主人と死別するや決意して5人の子供と上京、四十路でなお学校に通い、日本の鉱害の原点足尾銅山の鉱毒に苦しむ農民を救うべく田中正造の下に走り共に戦い、禁酒運動を行う日本基督教婦人矯風会<sup>註4</sup>第3代会頭となられた潮田千勢子<sup>註5</sup>の姿があった。

私は幼少から電気に興味を持ち結局弱電技術者<sup>註6</sup>として人生の大半を過ごした。分野は異なるが工学人として、東北大学金属工学研究所の教授を勤められ、金属の腐食・防食学の権威として名高い下平三郎<sup>註7</sup>が飯田駄科の出身で、やはり苦学の末その道を究めた方であることを知った。飯田に生まれ深志高校から東北大医学部に進み現在仙台在住で内科医院を営む加藤純二氏<sup>註8</sup>のご尽力で、先生の奥様から詳細な自伝や業績を入手することができた。

父禄郎は兄弟頭として中学を出ると家業の味噌醤油屋を継いで稼ぎ弟妹を進学させた。父は何事にも好奇心が強く味噌醤油醸造業の傍ら自伝<sup>註9</sup>を残した。1947(昭和22)年4月の飯田の大火で生家と醸造倉を失い再創業の苦労を味わった。

私は、働き詰めの父母、無私の献身で理想を追い求める叔父の影響を受けて育った。一方、父は叔父からの依頼で宮沢芳重を飯田の著名人に紹介していた。

南信州紙の前沢義行氏のお勧めも頂き、飯田出身で苦学して名をなした潮田千勢子、宮沢芳重と小塩完次の交流、下平三郎の四先達

の小伝を南信州紙へ投稿することが叶い、2013年暮れから新春に掛けて、「綴りの輪」欄に5回にわたり「一途に求め続けた伊那飯田の先達」と題し掲載していただいた。

連載記事が新聞に載ると各方面から反応を頂き文字通り綴りの輪が広がった。その主なものは

1 潮田千勢子にも触れた飯田市吾妻町教会発行の歴史本<sup>注10</sup>に、女史の経歴に新事実が記載されていることを発見、これが認められ教文館の『日本キリスト教歴史大辞典』の改訂2版に採用された。その後吾妻町教会川上寧牧師、信者佐藤克郎氏との面会が実現し『追憶 小林洋吉』<sup>注11</sup>をいただいた。

また、潮田家の住所につき代々近くに住む方から貴重な情報を頂く。除籾養本と異なるようである。

2 宮沢芳重の保存資料の調査と南信州紙への掲載記事は分量も多くなり2回に渡った。これらが市民にも知られ2014(平成26)年4月末の同氏のDVD上映とシンポジウムに招かれる切っ掛けともなった。また折良く完次叔父は、上記大辞典に掲載されることとなった。

3 下平三郎は、郷土に全く知られていなかったが、この記事掲載が取り持つ縁で同氏の姉妹が叔母に当たる臼井農園の古田学氏が申し出でられ、中央図書館で面会が実現し収集した資料と定本とされる著書を図書館に寄贈し、また同氏に資料を差し上げることができた。

以下既に公刊されている著書類との重複をできるだけ避けながら、宮沢芳重が飯田大学創設の理想を掲げ小塩完次を何回も訪ねていたこと、さらに臨終に至り遺言を聴取していたことなどを中心に第2章で述べることにしたい。

注1：下沢勝井、松下 拓著『人間 宮沢芳重』1976年7月5日合同出版。ほか公刊文書多数。詳細は第2章参照。

注2 前任日本禁酒同盟事務局局長小塩政子、飯田下伊那の歴史家として知られ、天童社史『蚕と絹の歴史』などを著した北沢小太郎氏の娘。

注3：『写真と日記で綴る小塩完次・とよ子の禁酒運動 世界連邦運動の歩み』2012年10月23日私費

出版、B5版180頁 飯田図書館蔵書、裏町文庫で販売中。

注4：日本キリスト教婦人矯風会 ネット検索 <http://kyofukai.jp/>

定説である潮田千勢子の経歴は、矯風会の雑誌婦人新報 No.75 に記載されている。

注5：例えば井川地文子監修 集英社1981年近代日本女性史8巻—自由と解放と信仰と—潮田千勢子の章 阿部玲子著。

ほか飯田図書館には、注4の資料、丸山、潮田両家除籾養本に至るまで各種資料が所蔵されている。

注6：『衛星イノベーションの高精度化に関する研究』拓殖大学学位論文2012年3月

注7：代表著作『腐食・防食の材料科学』アグネ技術センター1995年3月30日第1版以後斯界の定本として工学書としては珍しく版を重ね、現在2003年第2版5刷が販売中。

特に白鳥事件の検察が意図的に埋めた青銅弾丸の腐食は短期で発生することを証明した論文は有名である。

注8：日本禁酒同盟 ネット検索

<http://nippon-kinshu-doumei.fid531.com>

加藤宮千代医院 院長 加藤 純二 日本禁酒同盟代表理事

[http://www.geocities.jp/m\\_kato\\_clinic/index.html](http://www.geocities.jp/m_kato_clinic/index.html)

注9：小塩祿郎自伝『ご用伺い七十年』飯田図書館蔵。裏町文庫で頒布中。家業だった松岡屋醸造場は、現在木下 拓が社長として存続し味噌、味噌漬他、飯田下伊那で唯一醤油の醸造を続ける。

注10：潮田千勢子の経歴に触れた吾妻町教会発行の歴史本

『飯田吾妻町教会百十五年史』1997年3月 国会図書館、飯田図書館蔵。同女史が洗礼を受けたのはハリス宣教師から飯田で1884(明治14)年であり1年早い。定説は、注4では東京で1885年ソーパー宣教師からとされる。

注11：『追憶 小林洋吉』1998(平成10)年11月5日発行 小林誠・正之

旧竜丘村長野原出身、飯田地方の草分け基督者として多くの方々の尊敬を集めた。

## 第2章 宮沢芳重と小塩完次の交流

### 2.1 宮沢芳重の生涯と芳重地蔵

ご承知の方も多いと思いますが、旧生田村で1898(明治31)年に生まれた宮沢芳重氏は、高等小学校の後勉学の機会に恵まれず苦学を決意し上京、物理学校予科に学び、種々の仕事に携わりつつ勉学を続けた。晩年はいわゆるニコヨン生活を送り、生活費を極度に切り

詰め、節約したお金を飯田高校に天体望遠鏡を設置すべく送り続けた。

また、飯田に国立でも私立でもない郷立の大学を作りたいと言う夢を描き続け提案し、飯田図書館へ大学向けの基本図書として生前1,000冊以上の図書を贈り続けた。

1970(昭和45)年に亡くなられたが、自らの体を白菊会に献体され、葬儀は、遺骨が遺族の下に返還された翌年営まれた。松川町教育委員会の呼び掛けで、実に沢山の皆様の寄付により1972(昭和47)年氏の一途な志を崇め芳重地蔵が建立された。その模様はNHKが取材し後に「地蔵になった男」として放送された。

この映像記録は、実に40年の歳月を経て法政大学高柳俊男教授が主催する夏期講座「S」研修準備で下伊那飯田を調査する過程で着目され、先ず16mmフィルムが借用上映され、長沼節夫氏のご尽力で最終的にDVDの入手と上映が可能となり、法政大での上映会・座談会、続いて機運が盛り上がり出身地松川町と飯田で郷土の偉人宮沢芳重見直しの機運が高まり、本年4月の記念行事が実現した。

松川町教育委員会の綿密な調査により、日記の発見、多数の関係者の投稿を得て数冊の著作が松下 弘、下沢勝井両氏を中心に発行された。<sup>注1</sup>

また、氏の飯田郷立大学構想に触発され、伊那飯田の有志が下伊那教育機構連盟に集い、「学園飯田」を1966(昭和41)年から1～7号まで発行している。

氏が飯田市立中央図書館に送り続けた大学用基本図書は、宮沢文庫として保管されている。関連雑誌、新聞記事に至るまでが所蔵されている。

氏の遺品類は、松川町で現在まで大変丁寧に保管され、今回展示された。

このように、宮沢芳重の生涯や活動の全体像や、遺品はほぼ完璧に網羅され保管されています。

## 2.2 宮沢芳重と小塩完次の交流

私の叔父小塩完次は、1897(明治30)年の生

まれと宮沢芳重と同世代である。飯田中学を病弱で中退、専検で早稲田大学に学び、定職に就かず禁酒運動に挺身、戦後は世界連邦運動にも傾注した。子供はなく夫婦で極めて質素な食事を常とし、講演や執筆に際し頂く僅かな謝礼などで生活していた。日記を克明に書き残し日記帳は50冊余に及び、旧宅は遠藤新の設計で新地町に寄贈、解体移築して公開され、旧宅跡には親族抛出により小塩完次記念資料館が建てられ、ここに宮沢芳重との交流記録が保存されている。

同郷人でおよそ人のやらない理想を追い続けた点、苦学の軌跡も含め互いに相通ずるものがあり、東京の相談相手として、密度の高い交流をし、最後に遺言を聞き取っており、二人の交流軌跡は、既に公刊されているが、重複を避けながら述べたい。

同氏は、ほぼ一日一行の短文日記を残しており、叔父の日記や保存写真等を照合すると初対面は訪欧直後の1934(昭和9)年に遡る。

早稲田大学学生廃酒同盟の盟友横山鹿之亮が要職にあった白洋舎での仕事を叔父が紹介し、1942(昭和17)年10月30日大東亜戦争開戦後に就職している。この時期のことを国本利子さんは『素渦(そか)』に1941(昭和18)年頃のこととして、仕事の合間にも難しい本を読む特異な氏の姿を書いておられる。

終戦直後1945(昭和20)年11月28日道義新生会で再会したのを皮切りに、氏の叔父自宅訪問は1947(昭和22)年から亡くなる1970(昭和45)年の正月まで訪問の回数は、氏の日記と照合できるものだけでも13回に及んでいる。

最初は昼間に見えられたが、とよ子が「東京の正月は朝の食事にお困りでしょう。(正月は氏の常食食パンの耳、残飯などが得難いことを指す。)起きたら直ぐいらっしやい。一緒にお雑煮を食べましょう。」手許が不自由で柔らかいものを装って上げると何でも上がったものである。と『素渦』への投稿の中で書いている。それ以来、氏は叔父宅の正月恒例の客となった。律儀に禁酒同盟と世界連邦建設同盟の会費をとよ子に渡し、食事を共にし、完次と大学構想の話を始めると楽しそうだった。

た、とも書き残している。

このように何度も叔父の自宅を訪ね、大学構想について意見交換を行い、また文通していた。あるときは靴やオーバー、ビタミン剤を得たとも氏の短文日記に記録されている。正月訪問の際には近所に住む喜男叔父と子供達も加わることもあり雑煮を共にし、家庭の和みを味わっていた。

1958(昭和33)年10月末、氏が東京神田錦町の禁酒同盟の事務所に不意に完次叔父を訪れたことがあった。この時の様子を叔父は12月2日の南信州紙に寄せている。直立不同で、「お掛けなさい。」と勧めても座らず、作業現場の昼休み汚れた着衣を気遣ったのである。飯田介で「これでどうぞらのん。」と取り出した紙切れは下記の内容で、さすが講演会などで意表を突く質問への答えで鍛えた叔父も、その対応にたじたじだったと述懐している。

#### 教育機構問題巡回講座(仮試案)

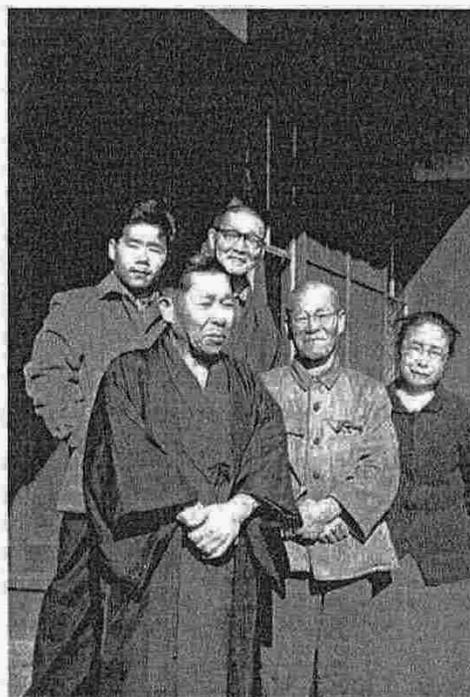
- ① 人間の目的は何ぞ
- ② 真理探究、平和、世界連邦の相関総合  
飯田大学創建の理念と必然音
- ③ 青少年純潔育成の原理

氏は飯田訪問の際、父を数回にわたり訪れ、松井卓治市長、池田寿一図書館長、北原明治校長、市役所の座光寺久男助役などへのとりなしを受けたことが氏の短文日記から見て取れる。

氏が武蔵野の叔父宅に正月何度も訪ねた中で写真が残るのは次の2回である。



1962(昭和37)年1月1日 小塩完次宅にて  
喜男(弟)、とよ子(完次妻)、洋(姪)、完次、宮沢芳重



1963(昭和38)年1月1日 小塩完次宅にて  
升平(甥)、小塩完次 喜男叔父 宮沢芳重 とよ子

1970(昭和45)年6月20日の完次宛私信には体は既に病にむしばまれ、焦りの色が滲み、『教育的見識者諸賢へ』と題する資料を送って来た。これを配布した同8月2日飯田での

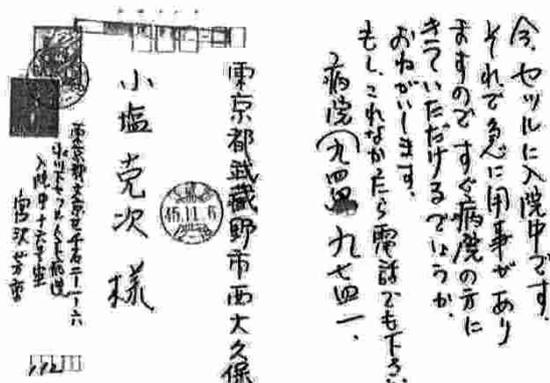
会議出席(学園飯田3号に収録)が最後の旅となった。

8月22日 文京区千石 2-1-6 氷川下セツルメント病院 16号室に入院したが、いよいよ病状悪化、11月5日付看護婦さん代筆で速達葉書を小塩完次宛に送り急いで会いたいと訴えている。

叔父が病院に赴くと、「ぼく 生命は終わる……」と宣言し遺言を伝えた。内容は公刊書に詳しくこれらに譲る。白菊会への献体手続きが肉親の印が得られず困り、急いのであった。氏は夙に1966(昭和41)年に白菊会の規則を検討したとされ、何回かの自宅訪問の間に話が出たと思われます。氏は1970(昭和45)年11月27日に逝去され、白菊会に献体された。一方、夫人とよ子もすでに白菊会への献体を決心しており親族も承知していた。

速達葉書の後、さらに電報を受け、とよ子が再訪し遺言を再び書き取り、特にドイツ語本2冊をKさんに送るようにと命令を受けた。

その後これらは無事発見されKさんとも連絡が取れたが、Kさんの希望で現在図書館に保存されている。



宮沢芳重氏が小塩完次に逢いたいと訴える速達葉書  
1970(昭和45)年11月5日 看護婦代筆

最期を迎えた前後に完次は、手許の広告の裏紙に次の4首を詠んでいる。

青刈りの 頭はもはや 見えなくなりぬ  
淋しくもあらむ 我が家の元旦  
生命は 終わると宣らし 芳重さ  
白菊会への 手続き急ぎぬ  
付添婦 性に合わぬは 取り替えて

安らかな君 みまかりにけり  
共産党の 病院に臥し 成田山の  
お守り封のまま 君みまかりぬ

また氏が亡くなってからと思われるが、次の二首を葉書の端に走り書きしている。

錠前の 掛かれる戸口 ふと見れば  
二三輪菊の 供えてありぬ  
その本の 神田の店の 紙のまま  
出できてそぞろ 君し偲ばゆ

少年時代勉学の機会に恵まれず無念の月日を過ごしたが、苦学して東京に出て物理や工学系の高い知識を得て1930(昭和5)年には陸軍技術本部計算班、1935(昭和10)年には五藤光学、1938(昭和13)年には運輸省航空局の技術畑に一時職を得た事が記録されている。また、前述のように白洋舎に就職したがやはり一年で退社している。独特の人柄の故か長続きしなかった事が覗える。

氏の日記を見ると志を達成するにはあまりにも清貧であり、野菜だけの日もあり、それさえ滞ることあり、腐敗した物を食べ食当たりに苦しみ、種々病歴もあり痔の手術を3回もしている。

1939(昭和14)年41歳の2月物理学校において脳溢血で倒れた。それでも左手で一文字一文字書く不自由な境遇にめげず勉学の意思は萎えなかった。研修学館に通い、東大理学部科学基礎論学会に参加し、東京天文台報を購読しておられる。

とよ子は、氏が亡くなる時点で献体をすでに決めており、次の二首を詠み『素 渦』に残している。

生命を 終えたる友は 白菊の  
花かざしつつ すすみゆきけり  
大いなる 望みいだきて 友逝きぬ  
後に続かん 白菊の花

1991(平成3)年に、とよ子が亡くなると親族は献体の手続きをした。

もう一人の叔父喜男は、完次宅で何度か宮沢芳重にお会いしていますが、正月の客の風貌や物腰にやや違和感を抱いていたことを『素 渦』への投稿で率直に認め、自身興味を



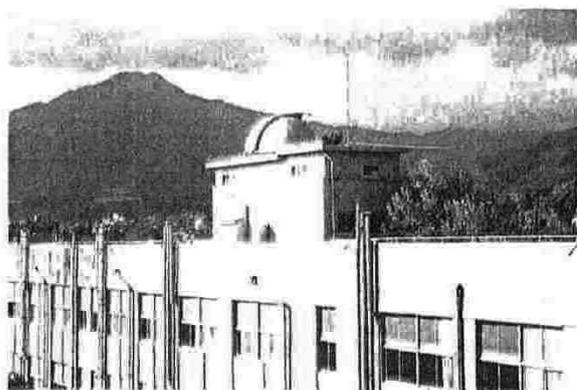
持ちながら読み得なかった狩野亨吉の研究を、氏が既に行っていたことを知り恥じたことを書き残している。

図書館訪れたとき「昼食は持っていますから。」と食べ始めた握飯には、見ると青黴が生え、これを平気で食べたとの逸話がある。当時の図書館職員斉藤俊江さんは、池田館長さんの指示で丼物を注文し差し上げても一切手をつけなかったと記している。

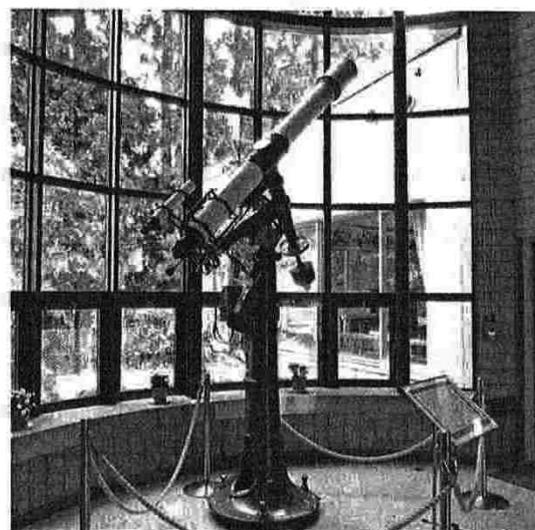
臨済宗の高僧になられた山田無文師にも匹敵する修行僧の超粗食を続け、一時たりとも贅食を拒む生き方を強く支え堪えたのは一体何によるのか、現代人の一人として満ち足りた食生活を送る私の大きい疑問であった。

氏の郷立大学の構想は、設立費用と運営維持費用などの財政規模の観点では、夢と現実の隔たりはあまりにも大きく、飯田の有力者諸氏は、志は受け止めつつも現実問題として誰も答えを出し得なかった。

しかし、望遠鏡に関しては、その志が飯田高校の北原明治校長始め伊那飯田の心ある人を動かし第一世代の天体望遠鏡が実現した。



旧校舎と第一世代天体ドーム



松川東小学校に移管展示の  
第一世代 五藤光学製屈折望遠鏡  
口径150mm 焦点距離2,250mm  
(旧校舎に1958(昭和33)年12月26日 竣工)

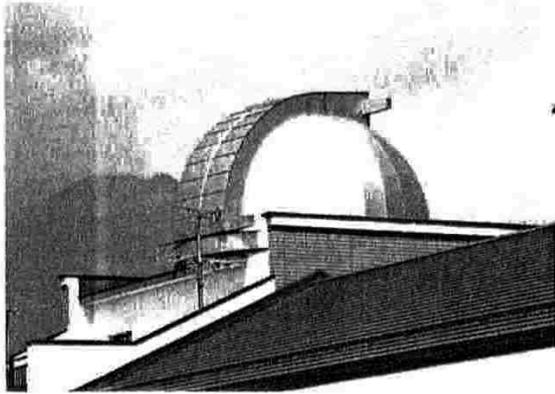
### 2.3 第二世代望遠鏡と小塩完次

時は下って、第一世代の屈折望遠鏡は、新校舎への建て替えに際し取り外され、出身地の生田東小学校に展示されることとなった。対物レンズ、接眼レンズは別室で除湿保管されているとのことである。

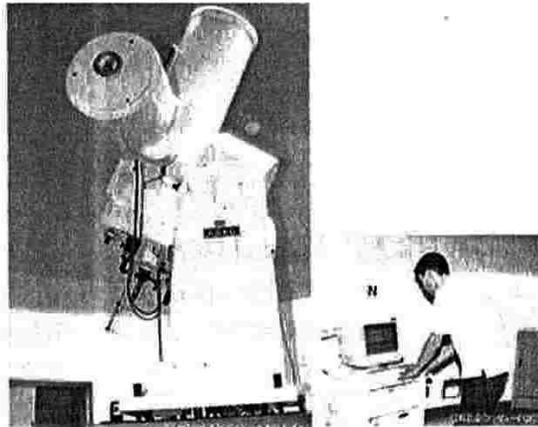
新校舎の建替に際し新天文台建設の話が起り、多くの篤志家の思いが再度実りつつあった。小塩完次の親族は、宮沢芳重との交流のことは良く承知しており、1996(平成8)年6月多くの篤志家、同窓会各位などと一緒に、丁度叔父が亡くなった後で遺産からある纏まった金額を寄進したことであった。



2000(平成8)年6月 寄附金目録贈呈。  
左より木下比奈、小塩立吉、  
長坂好忠同窓会長、木下俊佐校長他。



第二世代天体望遠鏡ドーム 直径5m



SA-400DPWカセグレイン式第二世代天体望遠鏡 注1  
口径40cm焦点距離 カセグレイン焦点 6,000mm



同窓会が制作し望遠鏡準備室壁に設置された宮沢芳重のレリーフ 注1  
他に、同窓会事務局に試作品があり、同窓生が訪問すると見られます。

## 宮沢芳重氏顕彰

宮沢芳重氏は1898年(明治31)松川町生田に生まれる。小学校卒業後農業に従事したが、向学の志おさえがたく、1918年(大正7)上京し、苦学力行の日々を重ね、1925年(大正14)東京物理学校(現理科大)予科を卒業する。

当時の日々とい労働の中で「飯田大学」創設という広大な考えを芽生えさせ、育て、それを生涯の悲願として貫いた。

1952年(昭和27)本校を訪れた氏は「郷立飯田大学」構想の考えを当時の校長に訴え、その実現化の第一歩として天体望遠鏡寄贈の趣旨を申し出た。

将来を洞察し、その理念を実現するために、浄財を地域に役立てる日々を徹した生活と信念は、社会の人々の大きな感動を呼び、ことさら生徒には限りない大きな夢を与えた。

当時としては最新式の6吋屈折赤道儀望遠鏡を備えた天文台が、北原明治校長はじめ学校職員・教育委員会・同窓会・PTA等多くの人々の協力を得て、全国の高等学校に先がけて屋上に完成した。時に1958年(昭和33)芳重氏60歳であった。

氏の活動はその後も休むことなく精力的に続けられたが、1970年(昭和45)11月27日、惜しまれながら72歳で現世の生涯を閉じた。

それから四半世紀、1996年(平成8)本校舎改築に伴い、時代にマッチした最新式天体望遠鏡の天文台が完成した。今もなお望遠鏡の彼方の星座を究めながら、ここに学ぶ生徒、そして縁の人々の心に脈々と巨星「芳重」が生き続け、輝き続けることだろう。

氏の業績を顕彰するにあたり、同町出身の彫刻家 南島和也氏(高48)制作による肖像レリーフをここに掲げる。

2002年(平成14)6月16日

長野県飯田高等学校同窓会

同窓会が新校舎に設置した宮沢芳重顕彰プレート  
注1

筆者は、1996(平成8)年10月12日新校舎落成記念式典に招かれ式典の後、宮沢芳重の夢の一つが世代を超えて開花した新望遠鏡を案内して頂いた。

パソコン制御で目的の星に直ぐ導入でき自動追尾され連続観測が可能である。口径が40cmもあるカセグレイン型反射望遠鏡の説明を受け、こんな立派な望遠鏡が飯田高校に設置できたことを誇りに思い、観測システムの発達に感動した。

高松高校在学中に天文班の平沢正道君が屋上に持ち出した屈折望遠鏡で南西の空に光る土星の輪を見せてもらい心をときめかせたことがあった。それ以来の感激であった。

少子化、人口減少の現実の前に第一世代天体望遠鏡を展示する松川東小学校は、2014年度末をもって廃校が決定している。望遠鏡の今後の保管管理問題が残り、校庭山側に立つ芳重地蔵も訪れる人が少なくなろう。

今までの故郷、松川町生田地区の皆様のご尽力に深く感謝すると共に、伊那飯田人にとって風化しかけている、この反俗の郷上の偉人の志を語り継ぎ、今後の保存のあり

方を相携えて考えて行きたいものである。

注1 : 第一世代および第二世代望遠鏡の性能諸元、レリーフ、顕彰板の写真は天文班浅井真也顧問のご厚意による。第二世代写真は新校舎竣工記念パンフレットによる。

### 3 今般のシンポジウムに参加して

2014年4月29日松川町松川東小学校で「地蔵になった男」上映会ならびにシンポジウム、遺品展示。

翌30日飯田市美術博物館で上映会とシンポジウム、関係図書展示、宮沢文庫見学などが行われ、筆者は松川東小学校での上映とシンポジウム聴取、遺品展示を見学した。

続いて飯田会場シンポジウムに参加した。飯田会場でも資料が配付されたがこの中に筆者が投稿し約半年前南信州紙に掲載された綴りの輪「宮沢芳重と小塩完次の交流」を含めて頂いた。(P130参照)

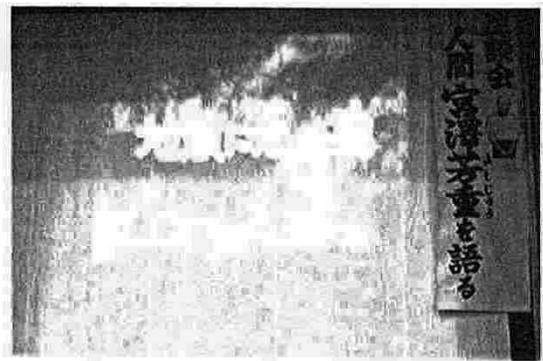
以下両会場での各位のお話、印象に残ったことを記すこととしたい。

#### 3.1 松川東小学校会場にて

雨にも負けず道にも負けず会場に続々と町の方々が集まれ、無慮432名に達したことである。

椅子を総動員しても不足し立見が多くなり、資料増刷も間に合わず後送が必要になり主催者側とボランティアの方々は正に行事後も天手古舞いであった。東小始まって以来空前絶後の参集者だったと聞き、皆さんが郷土の生んだ偉人への思慕が篤いことに大変感激しました。

会は先ず小木曾雅彦教育委員会生涯学習課長の司会の下、吉澤香代子副実行委員長のご挨拶に続きNHKが1973(昭和48)年1月5日に放送した「地蔵になった男」が上映された。このDVDは、ジャーナリスト長沼節夫氏のご尽力で同氏立会の下で上映可能になったものである。



芳重地蔵開眼慰霊会会場に入場する  
小塩完次 とよ子夫妻

当時取材に当たったNHK記者は、ご親族のお話などを収録する際、飯田生田弁の柔らかい丁寧な言葉使いと物腰を大変珍しがられたと、後に父から聞いたことがあった。番組冒頭でその片鱗を聞くことができた。



左から高柳俊男、奥村茂実、下沢アサ子、宮沢正仁、松下 拡、右端、吉澤香代子実行委員会副委員長

パネラーは出身地ならではの人選であり、宮沢芳重の甥に当たり93歳になられる宮沢正仁氏は1944(昭和15)年仙台に行く際、東京文京区根津の芳重伯父の住まいに2泊した時のことを淡々と語られた。その際の夕食はパンの耳が入った容器から互に掴み出して食べたこと、夜は掛け布団をぐるぐる巻きにして寝たこと、翌朝東京を案内すると航空力学と発動機の本を探しに電車にも乗らずに神田の古本屋街まで行き一軒一軒探し歩くのに同行し足が棒になったこと、見付からず結局三省堂で新本を買ったことなどを訥々と語られた。芳重叔父の詰め襟のややだぶだぶの服は、物理学校の制服だという。

この時既に氏は「空を制するものが勝ち、この次は、空間即ち電気を制するものが勝

見ただけですがその研究範囲が天文、数学に留まらず哲学から衛生学に至るまですこぶる広いことに感嘆した。

以下特に印象深いものを述べたい。

ニコヨンで収入に限られる中、極貧の食事と生活に自らを追い込み、一方で自己研鑽を続け、飯田大学の夢の為立派な本を贈り続け、高校に望遠鏡を、狩野亨吉の研究者鈴木正先生に研究費を贈るなどとても常人にできることではない。この生活信条を支えたものは何だったかは、私の年来の疑問だった。

- 腹の底の奥底のから分け合つる仲、衆に蔽はれ淡、秀麗な姿と魂の所有者たる俺が最愛最恩の不二、宇宙の探検の問題、雨に風に苦しむ動いた結果の笑こそ自然、神聖なる勞働の結果なる穀物を獲て微笑む。本當に好き久、はいつ迄も「無盡の味」がある。自分の身に在ると又格別。有友自遠方來、何人に対しても、山川隔ての無いの如く heart、遠路の疲れを醫す田舎の小川の水風呂、畑から採り立ての新鮮な野菜と漬物。木質を知る上の、真理に対する謙虚良心の一道。私は只だ私自身取がられはれするやうな人であらう。(秋嶺)
- 水はせのれこそ深い味が出る。せとめられたこそ淵瀬の静寂と奥幽しさがある。自らにせとめられたらのみ、青春の誇りも樂しむもある。我を我に拒む世界に本當の生活の意味、自分の何の一つの拒む世界をも得た的的の類をもつ。人間のなるかゝる彼岸を降に見出し、そこにふらむ立つが、拒み通せる力を見出す。拒むらにのみ生活は意義と感敬とを胎む。(圓諦)

宮沢芳重ノートの一部

江渡狄嶺の言葉、友松圓諦の言葉を引用している。

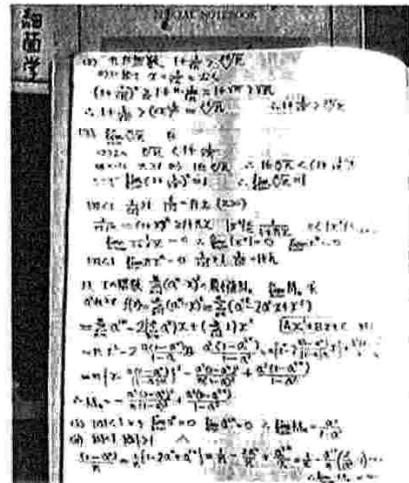
これは脳梗塞発症前の誠に綺麗な楷書で書かれた数多くのノートのほんの一部であるが、江渡狄嶺<sup>1)</sup>の言葉が抜粋され記されている。『土と心を耕しつつ』などを著した方である。

次に仏教学者であり真理運動を展開した氏とほぼ同世代の友松圓諦<sup>2)</sup>の言葉が抜き書きされている。芳重さんは自らの境遇に堪え研鑽に励む自分、妥協を拒みやり通す生き方は、これらの先達の生活信条を規範とされたのではないかと感じた。先の疑問がある程度解ける思いであった。

藪田義雄作詞生田東小学校の 土に生きる とする校歌とも一脈通ずるものを感じた次第である。

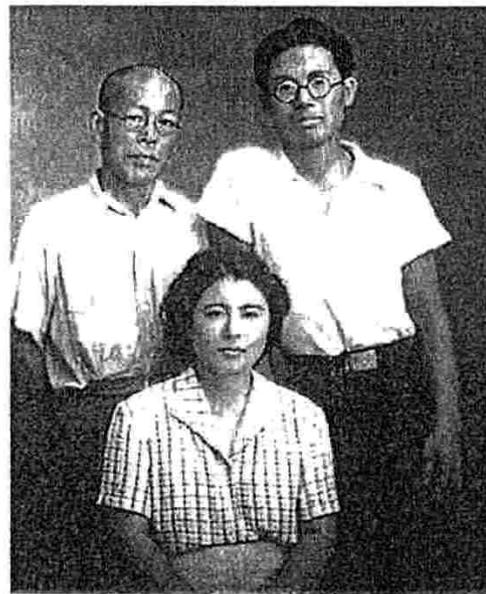
次の写真も遺品ノートの一部である。無限を表すためか複雑な級数式であり、発散あるものは収斂するものなどを垣間見た。このノートの奥に細菌学と書かれたノートも積んで

あり、学び関心を持った範囲が極めて広いことに驚かされた。



びっしり書かれた級数の式  
物理学校予科在学中であろうか

次は、年次的に 1950(昭和25)年夏、宮沢芳重 52 歳の貴重な写真である。



宮沢芳重52歳 1950(昭和25)年夏の写真 注3  
左より芳重、吉井信子、宮沢和夫  
同郷長峰出身の旧友宮澤繁一さんの  
二人の子供さん

当日、芳重地蔵見学が予定されていたが降雨中止となり、松下拡さんが講堂で縁起などを講義した。

シンポジウムの後、関係者を宮沢家の次次世代宮沢秀治、雅子さんご夫妻が雨の中お墓ならびに、長峰の小舎を建てた場所などゆかりの場所を案内して頂いた。



宮沢芳重墓所  
法名 文英芳徳居士



芳重地蔵  
東小学校校庭脇山側

### 3.2 飯田会場への出席と宮沢文庫見学

松川町会場の翌日4月30日に飯田市美術博物館で上映会とシンポジウム、飯田市立中央図書館で宮沢芳重文庫の視察が行われ関係者の予想を上回る260名の参加者を数えた。



飯田会場風景 前向き左端  
コーディネーター 伊沢宏爾飯田市教育長



パネラー 小塩立吉、吉澤香代子、羽場睦美、松下 拡の各氏

小塩は、昨年末に2回に渡り南信州紙に投稿し掲載された宮沢芳重と小塩完次の交流の記事<sup>註4</sup>を資料として提供しこれを中心に、伊那飯田出身で苦学偉人の一人として白眉の宮沢芳重の生涯を紹介した。

また、「学園飯田」No.3号に小塩完次が投稿した「総合飯田大学は酒代でできる」も資料Iの中で配布された。(P139 参照)

宮沢芳重は、飯田天文同好会報No.5号<sup>註5</sup>に「魅力としての・無限・」との論文を素湍名(芳重の雅号)で投稿している。以下抜粋して示す。

飯田天文同好会誌

## The Stargazers

1962

No.5 IIDA ASTRONOMICAL CLUB



### 魅力としての・無限・

宮 沢 素 湍

1. CANTORの天才と努力を以てして、数により無限を規定構成するのが集合論の一章。但し之は概念の論理域に終始し直観的の明証に遠し。大野心を以て之が解明に攻学する学徒に、或は大未完は当然必然の極相ならんか。

と書きだし、その12項で、飯田大学構想に触れ、夢は永劫無限まで。と記している。

12 飯田を山都から学都へ改脱する座標の原点、都市立総合飯田大学の初発構想、文科・農科・理工科・医科・教育文化・運営の格率を自由性に置き、世界良心と科学の第一線を相補に、刻刻、刻新に眼晴を磨す。永遠に、更に、更に一永劫無限まで。

13 有限と無限は本性上、相互に反射鏡の機能に於て意味を創る。萬象の起生・活動、其普遍則の生動を此処にも確認して当にあるべくして在る、宇宙の弁証法的調和の原理を讃悟す。

(1961.12.23.15)

論文は難解高尚であり、とても私には全容紹介はできません。松下拓さんに松川で面会させて頂いた折り、コピーを所望された。

吉澤香代子さんは、実父北原明治校長先生が、宮沢芳重が飯田高校に寄せた望遠鏡購入の提案や頭金を贈った好意を生かすべく奔走され、同窓会員始め各方面に呼び掛け寄付金を募り、第一世代天体望遠鏡の購入に至った年表、苦労話などを紹介された。

羽場睦美さんは、飯田下伊那地区に根付く野外教育研究財団の代表であり、宮沢芳重の郷立大学の考えとほぼ同時期に、これと無関係に他の構想が複数あったことに触れ、また、同研究財団での長年の研究経験に基づき、飯田地区での大学の存立の可能性などについて熱っぽく語られた。

松下拓さんは、昨日雨のため芳重地蔵見学こそ叶わなかったが、松川町・飯田市両シンポジウムを通して宮沢芳重への深い思い入れと『人間 宮沢芳重』などを著した深く広い知見と、各位の資料内容を事前に把握され、パネラーの発言を適切に補完・補強する発言をされシンポジウムをより高めておられることに感銘を覚えた。

会場には宮沢芳重関連の主要出版物<sup>註6</sup>を始め多数の資料が展示されていた。

続いて飯田図書館に希望者が移り宮沢芳重文庫の見学会が行われた。著書は、哲学農業から工学系まで広範囲に渡り 1,200 冊余、この中には前述の狩野亨吉全集も含まれていた。また、中央の雑誌、大新聞および地方紙の記事などを含め、飯田市立中央図書館では克明なリストと共に管理保管されている。



飯田市立中央図書館の宮澤文庫書架の一部

文中歴史上の方は敬称を省略したことをお断りしたい。内容が身内に渡るため書きにくい面がありましたが、事実に基づき虚心に書いた積もりです。ご容赦ください。

この記録が、人間宮沢芳重の資料として幾分かお役に立てば喜びとするところであります。



飯田市立中央図書館の宮澤文庫

注1：江渡沢嶺(えどてきれい)1881(明治13)年秋田県生まれ東大法科に進むが途中で退学し多くの哲学者、宗教者を訪れる。清貧な農家の営みを著しマルクスを超える百姓とも言われ、『或る百姓の家』『土と心を耕しつつ』などを生前著す。基督者となり来飯もしている。この時父禄郎自宅に一滴。その後も交流していた。没後門弟が『場の研究』を著す。

注2：友松圓諦(ともまつえんたい) 宮沢芳重とほぼ同年代、ドイツなどに留学、仏教家、浄土宗僧侶。仏教復興運動(真理運動)を始め、その普及を図る。画面で引用した文章の末尾は、拒むところにのみ充実と感激を胎む。(圓諦)と結んでいる。

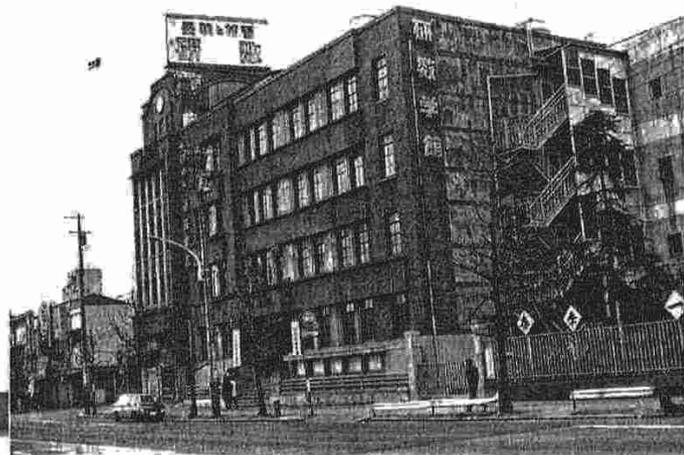
注3：宮沢芳重52歳の写真  
2014年7月6日法政大学での「地蔵になった男」のDVD上映会と座談会に出席した山崎節子氏が配布の地域雑誌『谷中千駄木』No.49号「おたより」に宮沢信子さんが亡き母の遺品として提供したもの。この貴重な小型写真を拡大し傷を修正した。

注4：南信州紙「綴りの輪」「一途に求めた伊那飯田の先達」の内「飯田大学の夢を描いた宮沢芳重と小塩完次の交流」  
上 2013(平成)年12月17日  
下 2013(平成)年12月24日

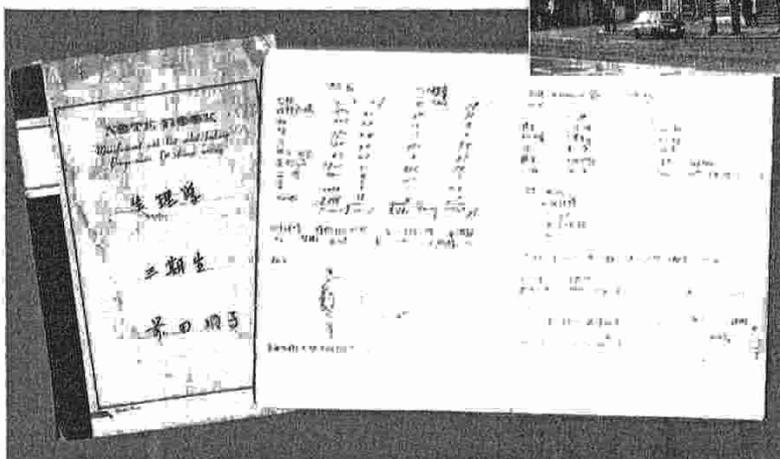
注5：1962(昭和37)年 No.5 飯田天文同好会誌、ガリ版刷り  
小型冊子。小塩完次資料館蔵。

- 注6：飯田会場に展示された主な書籍
- 1) 1972(昭和47)年に発見された宮沢芳重短文日記と年表。
  - 2) 1973(昭和48)年には追悼集『素 濁』 松川町教育委員会。  
素濁は宮沢芳重の雅号、実に多くの関係者が寄稿している。
  - 3) 1974(昭和49)年「信州白樺」14号宮沢芳重追悼特集号。
  - 4) 1976(昭和51)年には合同出版から下沢勝井、松下 祐二氏が綿密な調査の集大成として渾身の執筆『人間 宮沢芳重』  
推薦文は、本多勝一、池田寿一の両氏。
  - 5) 下伊那教育機構連盟の手で「学園飯田」として1966(昭和41)年から発行され1~7号。
  - 6) 雑誌『伊那』伊那史学会 1972(昭和47)年3月号に池田寿一飯田図書館館長が「宮沢芳重さん」を投稿
  - 7) ほかに週刊朝日ほかの雑誌、新聞紙記事の切り抜きなど多数。

※この稿は、当日の講演内容に本人が加筆されたものです。



戦後51才から亡くなるまで通った、水道橋の研数学館



ほとんどが学生寮のゴミ箱から拾ってきて使っていたノート  
ノート記名の学生とは全く関係ない